

6/23 沖縄慰霊の日

6月23日 空よ海よ

午前4時半、守備軍司令官・牛島満と参謀長・長勇は自決した。牛島は鹿児島、長は福岡の人である。最後に西南の役で西郷隆盛が自決した城山の話語ったという。

将軍たちが舞台から去っても「最後まで戦え」の命令は生きている。投降しようとする者はしばしば背後から撃たれた。

もし守備軍が南部を戦場とせず、首里に最後までとどまっていたら。

もし首里放棄の前に非武装地帯を作り、住民をそこへ移す手立てを米軍と協議していたら。

もし「最後まで戦え」と命じず、住民に対してだけでも米軍への投降を勧めていたら――。

「もし」はいくつもある。その一つでも実現していたら、一般住民の犠牲約9万4000という数字はかなり変わっていただろう。

さまよう学徒隊員たちも明暗を分けた。沖縄師範の教師で女子のひめゆり隊を引率していた仲宗根政善は、緊迫の瞬間をこう書き残している。

「敵兵が目前にあらわれた。12名の生徒たちは、車座になり寄り合って、3発の手榴弾の栓を抜こうと身がまた。福地キヨ子が、先生いいですかとさげふ。抜くのではない！ 抜くなど私が強くさげふと、福地は抜くのをやめた」。

多くの学徒隊員の運命はこうはならなかった。例えば、最南端の荒崎海岸ではこんな惨劇が起きた。第一高女生だった女性の証言。

――ウジだらけの死体に何度もつまずき、はいずり回る負傷者の間を逃げ回った。放射される火炎が迫った。12人のグループで潮が引いた時歩き、満ちたらカニのように岸壁にへばりついて逃げた。「お母さんに会いたい。もう一度、弾の落ちない青空の下で大手を振って歩きたいね」と一人が言うと、皆声を出して泣いた。米兵が現われ、銃を乱射した。混乱の中、手榴弾で10人が自決した。

男女学徒隊の死者は2005人に上った。

.....

●戦後六〇年の原点

ドキュメント 1945 沖縄 1945

玉木研二（毎日新聞編集局）

本土にとって、沖縄は、

いつまで「防波堤」であり「捨て石」なのか？！

三ヶ月に及ぶ沖縄戦と本土の様々な日々の断面を、このこの六十年間に集積された証言記録・調査資料・史実などを駆使し、日ごとに代言した「同時進行ドキュメント」。

平和・協同ジャーナリスト基金大賞受賞。

四六並製 二〇〇頁 一八〇〇円

ISBN978-4-89434-470-9



ご注文は FAX でお願いいたします。FAX: 03-5272-0450

藤原書店 東京都新宿区早稲田鶴巻町 523 tel 03-5272-0301 fax 03-5272-0450 info@fujiwara-shoten.co.jp

番線印

ドキュメント
()部 沖縄 1945

ご担当者